



2006/11/11 No.3

本号は、JNFEA 設立以来の懸案であった、ポカラのカニヤ・キャンパス内に建設した女性教員育成のための女子寮完成式の模様を特集します。入寮式典、第1期生の紹介、式典に伴うポカラ・カトマンドゥでの中澤桂さんを招いてのソプラノコンサート、そして、この間のイベントの合間を縫ってポカラ・カトマンドゥなど、チャリティー・ツアー参加者の皆さんの手記を交えての報告です。

「さくら寮」入寮式典に際して

JNFEA 理事長

山下 泰子

2006年8月6日、本日ついに、私たちの長年の夢「ネパール遠隔地女性小学校教員養成プロジェクト」(通称「ポカラ・プロジェクト」)が、スタートいたしました。ここに、平岡邁・在ネパール日本大使、ケダール・マテマ・前在日本ネパール大使夫妻、大木章次郎神父様をはじめ800人もの皆さまに見守られて、カニヤ・キャンパス・ポカラで、盛大な式典が挙行されますのは、何ものにも代えがたいよろこびでございます。多くの方々のご協力で、日本・ネパール国交樹立50周年という記念すべき年に、私たちの「ポカラ・プロジェクト」の実施拠点「さくら寮」が竣工し、第1期生10名を迎えることができました。

私たちのポカラ・プロジェクトの目的は、これまでの数次に渡る現地調査に基づいています。それは、ネパールにおいて、専門的な教育知識を持つ、質の高い女性教員を養成し、遠隔地域の少女の就学率を向上させ、中途退学率を減少させることにあります。もちろん、このような意図は、本来ネパール一国に止まるものではなく、途上国すべてに通じる今日の共通課題です。私たちのプロジェクトは、ほんの小さな第一歩ですが、ひとつのパイロット・ケースとして、大きな未来をもつ歴史的な第一歩を記したものと自負しております。

ここに至るまでには、本当にたくさんの方々のご協力を仰ぎました。在ネパール日本大使館からは、「草の根無償・人間の安全保障資金協力」のご支援を頂戴いたしました。この援

助を通して、さくら寮は、日本とネパール両国国民の友情の証となりました。さくら寮の建設には、竹中工務店設計部有志によるボランティア団体・AAFの全面的なご協力をいただきました。なかでも、AAF代表の赤尾建蔵氏と野田隆史氏は、お忙しい中を、何度も現場に足を運んでくださり、ポカラの建築会社インドレイニに細かい指示を与えてくださいました。

今日のこの式典に際しましても、日本から100人もの人々が、はるばる太平洋を越え、ヒマラヤの地ポカラに駆けつけてくださいました。さくら寮に、洗濯機、掃除機、テレビ、扇風機、炊飯器など、たくさん家電製品を寄贈くださった株式会社・東芝の社会貢献室の島治様、日本全国から、この式典のためにわざわざツアーを組んで来てくださった国際女性教育振興会の錦織淑子会長以下23名の皆様、お祝いにチャリティー・コンサートをしてくださるソプラノ歌手の中澤桂様、ピアニストの長町順史様、そして、私たちの「ネパールに、おなご先生を」チャリティー・ツアーにご参加くださった73名の皆様、さらには、面倒な旅行プランを全力で遂行してくださった風の旅行社の原優二社長以下スタッフの皆様、本当にありがとうございました。

もちろん、カニヤ・キャンパス・ポカラのレクハット・M. ラヴァージュ理事長、スレンドラ・B. バリジュール校長先生をはじめとする教職員、学生の皆様、皆様のご協力なしには、このプロジェクトは、そもそも計画もできませんでしたし、こ

れからの運営もできません。思えば、私が、文京学院大学の学生とともに、カニヤ・キャンパスをはじめ訪問してから、10数年のお付き合いになります。そのような長い交流の上に、これからはさらに密度の濃い連携関係をもってプロジェクトを進めて行きたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

とくに今回3倍の応募者の中から選抜された10名の寮生の皆さん、皆さんは私たちの希望の星です。ここカニヤ・キャンパスでの2年間の教育を終えた後、皆さんは、故郷に帰って、カニヤ・キャンパスで学んだ知識を活かして、小学校の先生になり、村の少女が学校へ行ける環境をつくるため、頑張ってください。日本からきているスーパーバイザーの友松史子先生や寮母のサンギータさんの助けを借りて、カニヤ・キャンパス・ポカラでの学生生活を大いにエンジョイしながら、やがて来る日のために勉強して下さることを期待しています。

寮生の皆さん、皆さんの勉学と生活を支えてくれるのは、

日本の教育里親だということをいつも忘れないでください。里親たちは、いつの日か、寮生の皆さんが故郷の村の小学校の先生として教鞭をとっている姿を見に行くことを楽しみにしておられます。寮生の皆さんは、こうした私たちの期待であるとともに、ネパールの明日の希望なのです。その誇りと自覚をもって、日々の研鑽を積んでください。

本日は、学生寮建築にとっては完成の日ですが、私どものポカラ・プロジェクトとしては、出発の日なのです。優秀な寮生を迎えて、すべてがこれからはじまろうとしております。前途には、乗り越えなければならない困難が、山ほどあるに違いありません。しかし、私たちは、今日のこの式典の感激を胸に、皆で協力して困難を乗り越えていく所存です。

ご列席の皆様、これからも、皆様のあたたかなご支援ご協力をよろしくお願いいたします。本日は、まことにありがとうございました。

(2006年8月6日)



式典ひな壇（前列中央・平岡在ネパール日本大使、その右隣・山下理事長）

選抜結果と

第1期生の紹介

2006年度 さくら寮入寮学生選抜結果

山下威士

<概観>

(1) <選抜のための会合> 2006年7月14日に、ポカラにおいて、JNFEA側から、顧問・大木章次郎神父、理事・磯公美子さん、スーパーバイザー・友松史子さん、KCP側から、Bharijoo 校長、寮母・Sangita Hamal の5名で、選抜のための会合を行い、応募者25名より、選抜を行い、下記

の10名が選抜された。

(2) <選抜のための資料> 選抜に際しての資料が、応募書一式、SLC（高校卒業資格試験）の成績だけで、本人を見極めるためには不足で、今後においては、応募を希望する学生に「エッセイ」を求めるなどの、本人を知るための資料が、なお必要であろうと議論された。

選抜の書式で、私どもがもっとも注目していた、現地の学校長の卒業後の教員としての「受け入れ予定」の承諾書は、いずれも添付されていた。たとえ、形式的なものであろうと、

女性教員の必要性の認識を、教育現場の責任者が示すものとして、重要な書類であろう。

(3) <選抜の基本方針> 選抜の方針そのものは、基本協約5条、および、それを具体化するための施行規則「学生選抜のためのガイドライン」3条に規定されている通りである。今回は、それに加えて、第1年目ということもあり、応募してくれた Feeder Hostel からは、必ず1名は選抜するように配慮した。結果的には、Doti FHから3名、Palpa FHから2名、Kapilvastu FHから2名、Gorkha 郡(AAF 推薦)から2名、Baglung FHから1名が選抜された。この4つの Feeder Hostel 以外に、Rolpa FHと Dang FHから応募があったが、残念ながら、それらの候補者は、いずれも本年の SLC 試験に合格しなかった。

(4) <選抜結果1 地域> 結果的には、選抜された学生は、本来のターゲットであった Far-Western Region からは Doti, Bajura, Bajun からの3名の選抜に止まり、それ以外の7名が、Western Region からの学生になった。今後は、できるだけ本来の Far Western と Mid Western のターゲット地域からの学生を求めていきたい。

(5) <選抜結果2 年齢> 選抜された学生には、満年

齢で22歳から16歳までの幅がある。

(6) <選抜結果3 SLC> 本年2006年度 SLC の結果については、11名応募中7名が、不合格であり、合格者4名は、全員採用された。これ自体、現在の Feeder Hostel 在籍の学生の学力状況を示すものとして注目すべきであろう。2005年度以前の応募者(当然のことだが、全員合格している)14名の内、6名が寮生に採用された。今回の寮生として採用された10名の内には、SLCの1st Class 合格者が、2名いる。ともに、Kapilvastu FHの学生である。2nd Class 合格者は、5名である。

(7) <広報活動の必要性> 今年は第1年目であり、そもそも、このような制度の存在することの宣伝が行き渡らず、バリジュウ校長のご尽力と、杉浦・理事、新井場・理事、滝田・理事などが、万難を排しての、直接の現地高校への訪問・説明で、何とか無事に選抜を終えることができた。今回の祝賀行事を一応終えたら、ただちに来年度の学生選抜のために、各 Feeder Hostel に連絡案内を密にする必要がある。とくに、これまでの事前の調査で、女性教員の不足と、質の悪さが懸念された Mid-Westren Region に対する広報活動を重視すべきであろう。



第1期生の出身地

2006年度入寮学生 紹介

註：D=District 郡

VDC=Village Development Committee 村落共同体 (Ward の上の地域名)

生年について、全員、ネパール暦で書いているため、換算に誤算がある可能性がある(とくに、月日は、現状では換算できない。西暦年とのズレは、±56年である)

空白部分は、資料的に不明な部分である。

Amrita Sharma 誕生日：1989.(2.20) 18歳



住所：Paiyunpata VDC, Baglung D.(W)
出身校：Bidhyamadir HS, Baglung D
SLC：2005 2nd
父親名：Krishna Rai Sharma
父親の職業：農業

Purdhani Ghale 誕生日：1985.(6.14) 22歳



住所：Barpak VDC, Gorkha D.(W)
出身校：Himalaya SS, Gorkha D
SLC：2001 Passed
父親名：Chandra Ghale
父親の職業：不明

Sunita Gyawali 誕生日：1989.11.24 17歳



住所：Baletaksar VDC, Gulmi D.(W)
出身校：Mohan Kanya HS. Palpa D.
SLC：2005 Passed
父親名：Narayan Prasad Gyawali
父親の職業：教員

Ramila Budha 誕生日：1989.4.17 17歳



住所：Chainpur VDC, Bajun D.(FW)
出身校：Padma Public SS, Doti D.
SLC：2006 2nd
父親名：Lal Bahadur Bohara(Budha)
父親の職業：農業(民宿)

Samghana Saru 誕生日：1989.1.27 18歳



住所：Chidipani VDC, Palpa D.(W)
出身校：Mohan Kanya HS. Palpa D.
SLC：2005 2nd
父親名：Laxman Saru
父親の職業：退役軍人

Maya Rokaya 誕生日：1990.(4.16) 16歳



住所：Martadi VDC, Bajura D.(FW)
出身校：Padma Public SS, Doti D.
SLC：2006 2nd
父親名：Man Bahadur Rokaya
父親の職業：農業

Sarala Majhi 誕生日：1987.(3.10) 20歳



住所：Nari Dong VDC, Doti D.(FW)
出身校：Padma Public SS, Doti D.
SLC：2005 2nd
父親名：Dal Bahadur Majhi
父親の職業：農業

Rinko Ghale 誕生日：1987.(4.28) 20歳



住所：baraak VDC, Gorkha D.(W)
出身校：Himalayan SS, Gorkha D
SLC：2006 Passed
父親名：Sher Bahador
父親の職業：退役軍人

Shanta Khanal 誕生日：1990.(2.10) 17歳



住所：Motipur VDC, Kapilvastu D.(W)
出身校：Banganga SS, Kapilvastu D
SLC：2005 1st
父親名：Romakhar Khanal
父親の職業：農業(姉が教員)

Sita Kumari Ghimire 誕生日：1987.(8.7) 21歳



住所：Kopawa VDC, Kapilvastu D.(W)
出身校：Banganga SS, Kapilvastu D.
SLC：2006 1st
父親名：Chhabi Lal Ghimire
父親の職業：農業



さくら寮全景

女子学生寮「さくら寮」がオープン

新井場貞子

昨年8月10日に地鎮祭を行った女子学生寮が、7月末に出来上がり、8月6日(日)に完成式が行われました。

式典はカニヤ・キャンパスとJNFEAの共催で、次のとおりの式次第でした。

カニヤ・キャンパス中庭に巨大なテントを張りその下での挙行。午前11時開始

主賓：^{ひらおかつとむ}平岡邁在ネパール日本大使

参列者：主催者側・山下泰子理事長、Lekhat Man Lavaju 理事長 Surendra Bahadur Bharijoo 校長

そのほかKCPの理事

ゲスト：Kedar Bhata Mathema 元在日本ネパール大使夫妻、錦織淑子国際女性教育振興会会長、大木章二郎神父、オペラ歌手中澤桂様、ピアニスト長町順史様、(株)東芝島治様ほかJNFEA、KCP関係者が司会に紹介されながら、1人ずつ壇上にのぼり席に着きました。

*副校長の歓迎のメッセージの後、キャンドルへの点火

*友松史子スーパーバイザーによる「さくら寮」の生徒の紹介

*寮のテープカット

*JNFEAとKCPの契約協定へのサイン

*パリジウ氏によるボカラプロジェクトの概要の説明



KCP校長パリジューさん(右)と寮母サンギータさん

*主賓、ゲスト、主催者の挨拶

KCP学生、地元の招待者約800名の参加者が巨大なマリーンブルーのテントの下で見守るなか、厳かに挙行されました。日本からは、JNFEAの呼びかけに参加して下さった方と国際女性教育振興会の皆様約100人が参列しました。式典の後、隣接する公民館で昼食のサービスがありました。

夕方は、5時から郊外にあるフルパリ・リゾートホテルにおける中澤桂さんによるオペラコンサートおよび長町順史さんによるピアノ演奏が行われ、生の音楽に触れることの少ない聴衆を魅了しました。

このコンサートは8日にカトマンズのソルティ・クラウンプラザホテルでも行われました。ここでも、400人からのネ

パール人、在ネパール日本人、在ネパール外国大使がみえ、中澤さんの透き通るような声にうっとりし、長町さんの繊細なピアノ演奏に酔いしれました。

平岡邁在ネパール日本大使のご挨拶(要約)

ネパールの経済的および社会的発展のためには少女たちの教育の推進が欠かせない。カニヤ・キャンパスがこのようになすばらしい寮と教育環境のなかでリモートエリアからやってきた女性たちが高等教育を受けられるよう配慮し、彼女らがいずれ各地域で教育に携わるよう努力してくれることを信じています。また、このプロジェクトが市民レベルでの日本ネパールの友好促進の証として、ネパールの人々の幸福のためにお役に立てることが、日本政府および日本国民の願いです。

およめさんに行かないで、 さくら寮の学生になることをえらびました さくら寮 教育里親と学生の対面式で 岩谷栄子

さくら寮開設記念式典に先だち、日本からお出でいただいた、教育里親等のみなさんと、学生達との対面式が挙行されました。一行を迎えてくれたのは、ういういしい、美しい学生さん達と、デコレーションされたまばゆいばかりのドミトリでした。スーパーバイザーの友松史子さんから、寮母さんと、10人の学生のご紹介をいただき、1人1人に、決意と抱負を語っていただきました。

みなさんの堂々とした、すばらしい決意表明に、日本人には消え失せているハングリー精神を思い起こさせ、感動にむせび、涙をそっとぬぐう方々の姿に、このプロジェクトの深い意義と役割を感じさせられました。学生達のスピーチを聞いてみましょう。

Aさん

SLC(大学入学試験のようなもの)の試験をやっと合格したのですが、都心部から遠い田舎なので、お金がなくて困っていました。JNFEAより、このようなチャンスを与えていただけてほんとに感謝しています。田舎に戻って、この恩を返したいと思います。

Bさん

ネパールの田舎では良い教育が受けられない現状です。ここで2年間一生懸命がんばります。そして田舎で先生としてがんばります。

Cさん

とても遠い田舎なので、教育が受けられなかったです。しかし、さくら寮で受けられるようになって、ほんとにうれしいです。田舎は男女の差が大きく、女の子は教育の必要性を感じていない大人が多いのです。だから、しっかり勉強して、教育は男女の差は関係なく共に必要であることを伝えていき

たいと考えています。

Dさん

遠い日本からさくら寮においでくださり、ありがとうございます。

自分の生まれたところはお釈迦様の誕生地ですが、小学校まで親が勉強させてくれました。そのあとは勉強ができませんでした。でも中学校から日本の支援で勉強ができました。さらにまたここで、勉強できる機会を JNFEA から得られたことはほんとにありがたいです。

Eさん

みなさま、そして、日本の大学生のみなさま、お出で下さりほんとにありがとうございます。田舎では勉強の機会がありませんでした。とても、このような支援はありがたいと思います。ここで一生懸命勉強を身に付けて、田舎で3年間教師をします。田舎は男女差がまだまだあります。そのような考え方を改善していきたいと思います。そして21世紀は勉強がいかに大切かということを伝えていきたいと考えています。

Fさん

皆さんを大歓迎します。JNFEA は大変大きな力を私たちに下さいました。田舎では教育は遠いものです。だから、私は、JNFEA のような支援で、しっかりと勉強して、田舎に帰って、子どもたちを教える力を得ることができます。3年間田舎で教師をすることを約束します。

Gさん

田舎で高校は卒業できました。SLC の試験も合格できました。しかし、ネパールは結婚が早い国です。学校が終わった時、結婚の話がありました。その時、さくらドミトリーの話聞いて、もっと勉強をしたいと思い、お嫁さんに行くことはやめて、さくら寮での勉強を選びました。ほんとによかったと思います。

次に教育里親を代表して、3人の方に励ましのお言葉をいただきました。

石川正三次様 (国際ロータリー神奈川東ロータリークラブ前会長)

私は英語でいうと stone river 石川と申します。皆さんに初めてお目にかかりました。日本の高校生に比べて、個性的でしっかりしていて、目が輝いています。結婚を少し、ずらしていただいて、ここでしっかり勉強していただくと、1人で100人、1000人、10000万人の生徒さんを教える事ができるということを考えていただきたいと思います。

最後にもう一つ、日本の横浜の高校生が絵本を英語に訳してくれました。今度お持ちしますから、英語をネパール語に訳して、子どもたちに読んであげてください。今日はありがとうございました。

山本育三様 (東海大学教授)

ナマステ!! 今日は歓迎をしていただいてありがとうございます。先ほどのすばらしいスピーチと大きな決意を聞

いて感動しました。2年間勉強したあと、田舎に帰って、立派な教育者になってください。みなさん、ここにきているお母さん達(参観者を指して)強そうに見えるでしょう。是非みなさんも世界一強い女性になってください。

鳥居淳子様 (成城大学教授)

みなさんを見ていて思いました。日本もネパールと同じ状況があったのです。わたくしの子どもの頃に戦争があって、その後、やはり物がなく、女の子は学校なんか行かなくてもよいと言われていた時代がありました。その中で女の子はみんな、男の子に負けないようにがんばって、今、いろんな仕事に就けるようになりました。ここにいらっしゃる方々は、やはり強い女性です。

ですからみなさんを見てると何十年か前の自分を見ているようで懐かしく思います。きっとみなさんも、日本の女性と同じように社会で活躍していただいて、立派な女性を育ててくれることを信じて疑いません。今日はとても立派なスピーチをいただいて、うれしくて、一言お話をさせていただきました。

さくら寮便り

友松史子

8月6日の大イベント「カニヤ・キャンパス・JNFEA 合同プロジェクトのスタートとさくら寮開寮を祝う会」が終わって、日本からのお客様が帰り、寮生たちにとっては、本格的なさくら寮での日常生活とカニヤ・キャンパスでの勉強生活が始まりました。

ネパールの学校や社会の1週間の始まりは、日曜日、お休みは土曜日だけ。カニヤ・キャンパスも日曜日から金曜日が授業です。

寮生の生活リズムを紹介すると、朝の起床時間は、個人によってまちまちで、早い子は朝4時、遅い子で6時頃起きています。でも、寮の開門時間は6時なので、寮全体の活動は6時から始まります。朝の6時から9時は、シャワーを浴びたり、洗濯をしたり、お祈りする時間に当てられています。そして、7時からは一斉に寮の共同スペースのお掃除。1階ラウンジとダイニング、3人。トイレシャワールーム、2人。階段・廊下が2人。ランドリールーム1人。外回り2人。掃除当番制で行います。お掃除のあと7時半ごろ、朝のお茶の時間。お茶が済むと、各々また自分たちの時間となり、食事を作る当番の寮生は朝食の支度に取り掛かります。ネパールの子供たちは夕方や夜のうちに宿題を済ませることは滅多になく、朝食までの時間を宿題や予習をしています。

朝9時半、朝食が始まります。朝食はもちろんダールバートとタルカリ。朝食後、皆でお皿洗いのあと、学校に行く支度をし、10時45分に寮を出て、授業に行きます。カニヤ・キャンパスの彼らの授業は、午前11時から午後3時40分。日本で「明日は×曜日だから持っていくものは……」と、バリ

ーションに富んだ時間割の教育カリキュラムを受けてきたものには信じがたいことですが、ネパールの授業の時間割は、毎日同じ時間割が繰り返されます。

1日の授業が終わり、学生たちが寮に戻ってきた後、4時半ごろ、午後のお茶とおやつを食べ、その後必要があれば、皆で市中にお買い物に行ったり、少し宿題をしたり、友だち同士でおしゃべりしたり、表で遊んだりします。寮生がとりわけ好きなのは、バレーボールかバドミントン、夕方遅くお祈りスペースでお祈りをしている寮生もいます。

また、食事当番にあたっている寮生は、夕食の支度をしますが、鍋を火にかけている間の時間を縫って、宿題をしている姿はとて微笑ましいものです。夜7時半の夕食を済ませ、皆でお皿を洗い、台所をきれいにすると、寮の1日のルーティンはほぼおわりなのですが、10時の静粛時間まで、ラウンジでおしゃべりに花が咲いたり、新聞をゆっくり読み出したり、テレビを観たり、時にはマドルという太鼓を持ち出して踊りの輪ができた、寮全体が一体となってリラックスしている楽しいひとときです。

和やかに毎日が送れることを願うさ中、事件がおこりました。寮生の2人が体調に異変がおきたのです。1人は精神的な体調異変。突然激しい頭痛に襲われ、癲癇みたいに気を失って倒れたのです。寮のすぐ目の前を流れるセティ河の対岸にあるインド系の総合病院マニバル病院に運び、精密検査を受けましたが、診断結果は脳にも異常がなく、癲癇でもなく、精神的病気ということで、数日入院し、その後、10日おきに精神科外来に通院するようにといわれ、退院しました。それ

からまもなく、もう1人が頭痛を訴え、またマニバル病院へ。診察所見は、脳の中にかつて幼虫として生きていたが、現在は死んでいる「サナダ虫」があり、死んだサナダ虫の周囲に浮腫ができていて、それが時折頭痛の原因となるという。サナダ虫自体は体外には排出できないが、浮腫に関しては、処方された薬の服用を続ければ、取り除いていけるとのこと。

発展途上国ではよくある病気らしく、医師も深刻な症例とは受け止めないようです。

日本での暮らしでは、想像もできないような症状の病気やハプニングの連続ですが、さくら寮の寮生が教員として、ネパールの自立した女性として成長していく姿を、どうぞ温かくお見守りください。



スーパーバイザー友松(右)と新井場(さくら寮担当理事)

チャリティーツアー参加者の手記と写真

ネパールの魅力 野瀬久美子

7月国際女性の地位協会の総会の折り、山下泰子先生から今回のチャリティー研修ツアーへのお誘いを頂いて、ツアーの趣旨の建設的な意義に賛同したこと、ネパールは是非訪ねてみたい国であったこと、ヒマラヤ山脈の懷で夏休みを過ごせたらどんなに快適かという三つの動機から参加させて頂きました。女性の教育機会向上のために優れた女性教員を養成するという目標を据えて、計画的に事業を進められている山下先生の企画力、組織力、包容力とJNFEA役員の皆様の心を一つにした協力の姿勢に終始心を動かされました。カニヤ・キャンパスの10人の新入寮生の皆さんが、その期待に応えようと一人一人真摯な決意表明を聞かせてくれた姿が目には焼きついています。まさに女性差別撤廃条約10条の条項を實踐するこのプロジェクトの成長を心からお祈りいたします。

初めての国ネパールに入って、いわゆる西欧列強の支配を受けることのなかったネパールには、生活の中に文化伝統がそのまま現在まで引き継がれている魅力を強く感じました。ヒンズー教と仏教の寺院がひしめくように建てられているパタンやバクタプル町並み。その一つ一つには繊細な彫刻が施され独自のスタイルを保持しています。朝毎にお供えをヒンズーの廟に捧げる信心深い人々。このような寺院をヒンズー教徒と仏教徒が一緒に使うという和やかな共存の姿を度々目にしました。カトマンズの商店街を歩いていて目に付く絨毯や毛織物の衣服やショールの配色がとても落ち着いて美しいことにも惹きつけられました。

ムスタン郡コバーンの学校訪問では、山下威士先生たちが入念に用意された日本からのプレゼントである鉛筆やピアノカ等々を素直に喜んでくれる子どもたちに思わずカメラを向けると、必ず両手を合わせて「ナマステ」と言ってくれるお行儀の良さ。ヘリコプターが到着すると周囲の村落から子どもたちが駆けつけ、ヘリが飛び立つとその方向へと夢中で走

る、素直に反応する子どもたち。昼間学校で会った生徒たちに午後の山歩きの帰途に出会うと、一人の少女は籠を背負い大きな魔法瓶を手に持って畑仕事をしている家族にお茶を届けると云う。6年生の男の子は“おんぶ紐”で妹を背負い優しく子守りをしていました。子どもたちの生活の中で、通学も家族の一員としての家事も極く自然に一体となっており、周辺の畑には薄紅色の蕎麦の花がきれいに咲いていました。

ツアーのお仲間や快活で親切な「風の旅行社」のスタッフに助けられながら、私自身もヒマラヤの素晴らしさを体験することができました。8000メートル級の山々が迫る世界に他に例の無い自然の宝庫を国家の観光資源として活用し、その美しい自然の中でゆったりとした心で生活する人々の暮らしが、現在 GNP ではアジアでバングラデシュに次ぐ低生産という困窮状態を脱して改善されることを願い、一見平穏に見えるが実は内乱の停戦中という政治情勢が好転し、ネパールが是非「アジアのスイス」となることを希求して止みません。

おめでとう、ポカラに咲く『さくら寮』！

(‘学遊’ 山下夫妻について語る)

松波勝弘

50年ほど前。日本は“アンポハンタイ”を叫ばなければ男でないとされた時代だった。学園紛争に明け暮れ、青二才学生だった我々の胸を熱くした。最近、王制から議会制へ復帰したこの国の雰囲気。検閲で表面に出ないが、どこか当時の日本に似ていないか。

当時人気だった英米法に背を向け、マイナーの独法に進んだ大学のハグレ組に、山下威士(理事)がいた。「義を見てせざるは……」の熱血児。反面、優しくそそっかしい点、いままも変わらないのがうれしい。広島県人の典型だ。(同窓にこれに輪を架けた異性同県人もいたから、そう思う) 彼が「虎穴に入らずんば……」と宣言したかどうか忘れたが、連れて出てきたのは虎子(こじ)に非ず、泰子さん(理事長)だったから驚いた。2人は結婚した。

100年前。サンスクリット仏典を求め、鎖国中のチベットに侵入を企てた禅僧、河口慧海がいた。意図を見破られると殺される危険を孕む。生還せねば意味がないと、わざわざカトマンズ、ポカラを経由、大ヒマラヤ山系の道なき道を北西へ迂回し本望を遂げた。後に「チベット旅行記」を著す。読み進めるにつれ、性格と行動パターンが実に威士(理事)と似ている!(詳細紙幅不足)

「学生の頃よく北アルプスに登った」と泰子さん。やがて「穂高に飽きヒマラヤへ」足を伸ばすようになった。男尊女卑の国。女性は牛馬同然、労力供給源としか見なされず、初等教育すら不要だと。15、6歳で嫁に出され、嫁ぎ先でも家事や重労働に追われる。平均寿命は男より短い。こんな運命を背負った無学の少女たちに僻地で行き交い、親しくなるにつれ、初等教育の必要性に心が傾いていったと言う。義務教

育制度はない。1人当り国民所得も実に日本の100分の1にも及ばない。最貧国の1つだ。

着想から20年余、泰子さんは支援者たちと一昨年、NPO日本法人「日本ネパール女性教育協会」を設立。念願の「おなご先生」養成プロジェクトの第一歩を、ポカラで踏み出した。高卒資格をもつ僻地の少女たちを公募、郷里の先生として養成する自立循環型構想を実現してしまったのだからすごい。そのワケを聞いたら、「深みに嵌っただけよ」と言って笑った。

様々な分野から協力を得た点も特筆に値する。ソフト(運営)は、ポカラのキャニアキャンパス(女子大学)。ハードは、竹中工務店の設計部有志たち。現地の工法や資材を活かすかたちで手を貸した。在ネパール日本大使館はODA「草の根無償資金」約1,000万円を提供。(泰子さん自身、私財を投じたことは周知のとおり)。半生をネパールの障害児教育に捧げ、今なお、ポカラで活躍を続けるイエズス会の大木神父が、暖かい支援の手を差し伸べられた。真に心強い。祝賀コンサートにノーギャラで出演してくれたソプラノ歌手、中澤桂さん。運動の広がり泰子さんの熱意に動かされた両国教育界指導層の存在があることは論を待たない。

2006年8月6日。炎天下。待ちに待った『さくら寮』が落成。第一期生が入寮する式典だ。後にも先にも只一度、千載一遇のイベントに立会わない手はない。「テントの中に収まってくれればいい」と言う山下夫妻の呼びかけに、‘学遊’山本英雄夫妻とボクの3人が快諾。‘野次馬参加’だ。キャンパスに巨大なテント村が出現し、第一期生10人の少女たち、主催者、来賓、全校生徒、総勢数百人が集う。少女たちの中には「バスを乗り継いで10日かかった」子もいた。皆、目を輝かせていた。感慨深かい光景だ。

「10年で100人の‘おなご先生’養成プロジェクト出発！」と、7日の地元各紙。おめでとう、山下夫妻、支援者、そして読者のみなさま!

ゴサインクンド・トレッキング顛末記

清水 信

2006.8.9

曇りがちだが薄日も射すまあまあの天候。山下理事長はじめ数人のホテル残留者、そしてサンセットビューホテルの紘子ママさん達に送られて8:00に出発。ゴサインクンド・トレッキング班は推定年齢順に清水、高野、袖山、滝田、西森、細田の6隊員とサーダーのスルヤ君、サブのディル君、同じくサブのcock、それにポーター3名の合計12名のパーティー。大型バスを借り切ったの豪華な旅立ちである。今日の予定は舗装道路を3時間かけて75km走り、Trisuliと言う村で昼食・休憩。そして砂利道をまた3時間かけて50km走りShaphru(標高2,260m)まで行く予定である。

11:00過ぎTrisuliに着く。ダルバートやラーメンを食べる。食後の休憩をしているとサーダーのスルヤ君が、この先

道路が崩れて通行止めの可能性がある、との情報を得る。ここまで来たらイケイケである。

12:30 頃バスは Trisuli を出発。1 時間半くらい走ったらバスはストップした。見るとたくさんの人と車。やはり土砂崩れによる通行止めは本当であった。

14:15 出発。ここは海拔 2,000m くらい。しばらく歩くと土砂崩れ箇所に出会った。ごうごうと流れ落ちる沢の水。こわごわ上からの落石に注意し、足元の浮石にも注意しながら水勢に負けないように渡る。幅僅か 10m 弱だけど命がけである。

道路崩壊箇所を何箇所か渡り、30 分くらい歩くと雨がポツリポツリと来た。たいした事ないと思い細田隊員に小生の折りたたみ傘を貸して歩いていると、突然バケツをひっくり返したような大雨になった。

Dhunche の方から青年たちが下りてきた。スルヤ君が様子を聞くと、これから上の方も何箇所かで道が崩れており、自分たちも崩壊箇所を渡った瞬間また新たに崩れて非常に危険な状態である、との情報ももらう。そこでスルヤ君の決断は、ここから少し戻って今夜は民家に泊めてもらおう。いやもおもうもない。着いたところは道端の食堂。そこにはポーターたちが待機していた。2 階で泊まれるとのこと。さっそく 2 階を偵察。きれい汚いは言っていない。戸板に足をつけたベッド(縁台)が 6 台ある。お世話になるしかない。食堂でミーティング。温かいミルクティーがおいしい。

外はまた雨が強くなり、屋根をぶち抜くほどの雨音である。1~2 時間ごとに目が覚める。明日からの予定を考える。「勇気ある撤退」を検討しても良いのでは等を考えてうつらうつらしていた。

2006.8.10

3:30 目を覚ましアウトドアの自然トイレに行く。空を見上げると十六夜の月明かり、満天の星空である。虫の知らせがある。何かの知らせがリスクを未然に防ぐかもしれない。リーダーに従うと方針を示した西森隊員に、袖山隊員とゴサインクンドに行くよう促し快諾を得る。ここで 2 班に分かれて、小生は 3 隊員にすまない、申し訳ないと思いつつ山を下ることにする。



ゴサインクンド行きは 2 隊員とサーダーのスルヤ君、サブのcock、ポーター 1 名の計 5 名。下るのは隊員 4 名とサブのディル君、ポーター 2 名の計 7 名。お互いの安全を祈願しつつ左手と右手に分かれる。

バスが止められている崖崩れの現場に来た。昨日の崩れ方と形が違う。渡っている最中形が変わるような崩れがあったら、と考えるとゾットする。早速貸し切りバスの交渉である。しかし、結局パブリックバスで Trisuli まで行くことにする。運よく最後列に 4 隊員が並んで座った。

2 時間ほどで Trisuli に着いた。ここで下からの迎いの車を 3 時間ほど待たねばと思っていたら、なんとそこには「風の旅行社」スレシュ君がトヨタランドクルーザーで迎えに来ているではないか。

タメルのホテル(MARSHYANDI)に着きシャワー、着替えをする。夜は島本事務局長と合流して日本料理店「ふる里」で食事をする。スレシュ君から明日からの予定の説明を受ける。カトマンドゥ盆地の北側を標高 2,000~2,500m のトレッキングだとの説明。

2006.8.11

8:30 ホテル発。車で Sundarikal に着く。9:15 海拔 1,415m の Sundarikal を全員元気良く出発。とここまでは良かったがスタート地点から標高差 600m は部落内を通るため殆ど階段。年長的に足が上らなくなった小生には大苦痛。10m 登っては休み、また 10m 登っては休みで他の隊員に大迷惑をかけた。その点若い細田隊員はどんどん登っていく。うらやましい~。



早めに昼食をとり、ゆっくり休憩して Chisapani に向かって GO! そこからは山腹を通ったり尾根道に出たりし、また途中花を観察したりしながらトレッキングを楽しむ。Chisapani ~ Sundarikal 間はゴサインクンド・トレッキング周遊右回りコースのカトマンドゥに戻る最後の行程で、集落間の連絡道としても多く使われるのですれ違う人も多い。

Chisapani のロッジに着いた。早速シャワーを浴び着替えをする。ミルクティーに始まりダルバート、カレー、ラーメンそしてビール、みな思い思いの食事をする。高野隊員、足の踵の靴擦れがひどく、皮がむけて赤くなっている。滝田隊員が絆創膏で治療する。今日の歩行距離は約 20 km だそうだ。

2006.8.12

朝5時ポーターに山が見えると起こされる。雲は多いが稜線ははっきり見える。生で見るヒマラヤだ。しかし神のいたずらか雲に太陽光線が邪魔されて朝焼けは見えない。それでもヒマラヤを見た感激を味わった。朝食・荷造りをして8:30出発。

昼近く車道(?)から山道に下った。雨がポツリポツリと来た。またカッパと思ったらすぐ脇の建物が食堂であった。今日はラッキー! 食堂に駆け込みラーメンと焼飯を注文して食べる。食堂の庭から遠くを眺めると、今日の目的地Nagarkotのホテル群が見える。

Hotel View Pointに着いたのは午後5:30を回っていた。このホテルはヨーロッパ人達で満室状態。今日の歩行距離約25km。この2日間歩きづめに歩いた。当初目的のゴサインクンド・トレッキングから大きく外れたが、ゴサインクンド・トレッキング班を含めて、皆無事に帰ってこられて本当に良かったと思う。そして皆でリベンジを誓った。

ネパールの自然の威力にふれて ゴサインクンド探訪の旅 袖山正彦

ゴサインクンドはヒンドゥー教の四大聖地でカトマンドウの北、直線距離で約60キロメートルの所にある。道路はハイウエーとは名ばかりで、胃袋がひっくり返りそうな急カーブのデコボコ道を猛スピードで登山口のあるダウンチェの町をめざした。途中、土砂崩れのためバスを降り次の中継点まで徒歩で移動した。歩き始めて1時間、突如、稲光とヒョウ交じりの雷雨の襲来を受け、全員全身ずぶ濡れになり、震えながら近くの旅籠に避難した。それにしても土石流の威力は凄まじい。谷間上流の急斜面から何トンもある岩石が土砂と一緒に転げ落ちて、今、通ったばかりの道路が、あっという間に崩落してしまった。落下した大きな岩石も土泥の上に浮いているだけで、足を乗せたら簡単に動き、滑り落ちそうになった。雷雨の中、お祭り帰りの女性巡礼者の一行はサリー、ゴム草履姿で平気で崩落現場を越えて行く。オートバイは村人が1台200Rsで請負、優先的に渡していた。ネパール人の通行ルールは自動車同様、お互いに譲り合ことは無いので混雑はするが、皆が適当に渡るので、喧騒にならないのは立派である。

翌日、ゴサインクンドに行く西森、袖山組とカトマンドウに戻る組に分かれた。天気は快晴、昨日雨で見えなかったガネッシュ・ヒマール、ランタン・リルンがはるか遠くに顔を見せてくれ、元気が湧いてきた。街道はカトマンドウに帰る巡礼者の長蛇の列が黙々と続いている。約3時間掛かってダウンチェに到着。軽い昼食を摂り午前11時に今日の宿泊先のシンコンバ(3254m)に向け出発した。道はゴサインクンドを水源とするトリスリガンガに沿って緩やかに降る。川は



水量も豊富できれいである。ゴサインクンドから下山した巡礼者が気持ちよさそうに体や顔を洗っている。山道はそこから急坂となり、すぐに樹林帯に入る。尾根の所々に巡礼者相手の青いビニールシートの食堂兼野営小屋が祭りの跡始末をしていた。また、うっそうとした斜面に夏の花が一面広がっている。幻の花ケシ科の青いメコノプシス・ホリデュラは見られなかったが、写真も沢山撮れ、ゴサインクンド花街道を十分満喫することができた。シンコンバに4時30分到着、きれいなロッジやチーズ工場があり、帰りにヤクのチーズをおみやげに買ってきた。

翌朝8時、ラウルピナヤク(3930m)経由ゴサインクンド(4312m)に向け出発した。途中高度順応するため十分な水と休憩をとりながら登り、約2時間半でラウルピナヤクに到着した。ラウルピナヤクからの眺めは絶景に値する。青いキャンパスの中に右からランタン・リルン、ガネッシュ・ヒマール、マナスルなどヒマラヤの名だたる山々が手に取るように見える。来てよかったと思うと同時にカトマンドウに戻ったメンバーのことが気にかかる。ラウルピナヤクを過ぎる頃から呼吸が浅くなり高度障害の影響がでる。ガイドは歌で励まし、ゆっくり深呼吸を促しながら登る。登山口から頂上まで同じリズムで登るガイドの登攀技術は大変参考になった。午後4時、スリヤ・ピーク(5144m)の麓に抱かれた3つの大きな湖(その1つがゴサインクンド)に無事到着した。湖畔にはリングとヨニを祀った祠と聖水が湧き出る祠があり、伏流水がゴサインクンドに注いでいる。両祠にJNFEAの活動報告とさらなるご加護を祈念し、聖水と真っ黒に日焼けした肌をおみやげに下山した。

日本では経験できない沢山の物、自然にふれることができた。同伴した西森さん、ガイドのスリヤさんほか「風」の現地スタッフの皆様に感謝申し上げます。

飛び入り参加・ネパール5日旅 石川正三

ネパールへの第一歩は駆け足。ビザの申請にイミグレーションまで空港のなかを久しぶりの全力疾走。のんびりした手続業務に耐えている内に、3日以内の滞在は、30ドルの申請

料不要との知識も取得？ やっと外に出て、感じたのはタバコの愛好者が結構多いこと、ヘビースモーカーの私にとってまずはホッとする情景でした。ポカラへは、客席から操縦席が丸見えの双発のプロペラ機。何十年ぶりかの搭乗です。スピードばかりが優先する日本の社会にドブりと漬かってきた私には、“この旅は全てがのんびり”の予感が広がってきました。そこで、気持ちを切り替えて、できるだけゆったりと心を癒しながら旅した私のネパール滞在記をご披露しましょう。

前日は工事中だった正門や通路がすっかり整備された「さくら寮」は、さすが竹中工務店の建築だけに立派なものでした。制服で出迎えてくれた第1期生の10名の学生さんたちは、とても17歳とは思えない落ち着きぶり。個々の主張もはっきり持ち、直ぐにでも先生が勤まりそうで、里親の一人として、安心をしました。今後どのような、“おご先生”に成長するか、2年後が楽しみです。記念式典が定刻に始まったのにも驚きました。途上国では、一般に1時間位の遅れは普通ですから、これはネパールの良き国民性かと、ちょっと見直した次第。

シスター川岡経営の保育園は、掃除が行き届き、しつけも厳しく、それでいて子どもたちが明るく闊達で、シスターの

お人柄と信念の確かさがわかり、感銘を受けました。そこで私のロータリークラブが長年手がけている、日本の絵本に現地の文字をつけて寄贈する活動の引受先を、今後お願いすることにしました。保育園には、すでに各国の絵本が贈られています。何でも破いたりする子どもたちが、なぜか日本の絵本だけは丁寧に扱い、皆で見入っているとのこと。クラブの意向を受けて、絵本の翻訳に取り組んでいる横浜のフェリス女学院や同志社女子大の学生さんたちに報告したら、新たな励みになると考えています。

台北での行事に出るために、今回はツアーの前半だけで失礼しましたが、事前の勉強不足から、帰国当日の早朝訪れたパタン地区では、寺院の建築の多様さに驚いて時間不足を嘆き、またヘリで行けるというコバーン行きも逃して残念な思いをしています。再び、慌ただししい東京に戻って街を歩いていますと、パタンで買ったピンク色の岩塩が、なんと現地の20倍の500円で売られており、改めて日本の物価のひどさを実感したりしています。飛び入りで参加した私にご配慮いただいた多くの会員の皆様に“ダンニャバード”とお礼申し上げます。

中澤 桂さん ソプラノコンサート

8月6日 ポカラ会場 8日 カトマンドゥ会場



ホテル・フルバリ・リゾート ロビーにて（ポカラ）

こんなことって！

新井場貞子

ペダルがないピアノって想像できますか？ まさか、まさかって.....

8月8日のカトマンズ、ホテル・ソルティ・クラウン・プラザでの、チャリティコンサートの当日、開演3時間前のこ

とでした。

日本人の律儀さから、JNFEA 理事一同は、開演7時間前にホテルに着いて、プログラム等の準備を終え、3時間前になっても床掃除をしているホテル側の態度にヤキモキしているとき、リハーサルのため早めに到着したピアニスト・長町順史さんが、舞台にセットしてあるピアノを見て、背を向けて立ち去りました。見ると、まさか、まさかの事態が起きて

いたのです。

それから山下理事長の本領が発揮されました。盛装したサリー姿でホテルのトラックに乗り込み、日本大使館公邸に乗り込んだのです。実は、カトマンズにグランドピアノがあるのは、こここのホテルと日本大使公邸だけなのです。このコンサートを開くにあたって、ピアノを借りるについては大使館に断られた経緯があります。

どんないきさつがあったのでしょうか。30分後、彼女は黒光りするピアノと共にホテルに帰ってきました。沢山の手がピアノを舞台上に持ち上げました。調律師がはいり、10分遅れでコンサートは始まりました。ネパール人、ネパール在住日本

人、各国大使および大使夫人ら（その中にはオーストリア大使もいました）300人がこのコンサートを楽しみました。

レセプションの席で、平岡日本大使は「このピアノは私のdonation」と挨拶され、山下理事長は「日本大使館が日本ネパールの文化交流に大きな貢献をし、このことは大使館の名を高めるでしょう」と讃えました。

ピアノがあるということは、すべて完全な状態でセットされている日本の状態をそのままネパールにおいてもそうであろうと思込んだ日本人の感覚を持ち込んだ私たちの勘違い、国情のちがいを痛く思い知らされた一件でした。

NPO日本ネパール女性教育協会 2006年度 活動リスト

2006年

- 4.16 第4期第1回理事会（文京学院大学・カトマンズ・ブータン）
- 4.24～5.1 日本訪問（杉浦実理事）（学生寮建設現場視察、KCP関係者と懇談）
- 4.28～ AAF野田隆史氏 加学生寮建設現場視察
- 5.20 第4期総会（文京学院大学 11F・カトマンズ・ブータン）
- 5.27 神奈川県東区クラブ 創立30周年記念式典出席（山下理事長・新井場理事）英語教材（同志社大学生考案）を寄贈された。
- 6.15～24 杉浦実理事日本訪問（記念コンサート&ボタニカル・プロジェクト交渉、広報活動ほか）
- 6.25 第4期第2回理事会（文京学院大学・カトマンズ・ブータン）
- 6.29～7.14 新井場理事日本滞在（寮開設準備・AAF赤尾氏の寮建築現場視察・点検同行など）
- 7.8 友松史子会員、さくら寮メンバーとして着任
- 7.9～8.7 磯理事日本滞在（ボタニカルで上記2人に合流、さくら寮開設準備ほか）
- 7.14 東芝からの奇贈電化製品が到着
- 7.14 ボタニカルにて寮生選考委員会
- 7.16 第4期第3回理事会（文京学院大学 B館 7階 711号室）・ツアー説明会
- 7.23 日本へ送る荷物梱包
- 8.1～10 新井場理事日本滞在（寮開設準備ほか）
- 8.3 先発理事が日本へ出発
【さくら寮開設式典・中澤桂チャリティコンサート】（8.4～8.16）

- 8.4 後発理事が、日本参加者一行と共に日本へ出発
- 8.6 11時からカトマンズで入寮式典。日本からの日本参加者約100名のほか、カトマンズ教師・学生、小中学生徒なども参加して、盛大に催された。来賓からの祝辞、プロジェクトの経過報告、寮母・寮生紹介、平岡日本大使による寮の落成記念テープカット、プロジェクト基本協約署名式などがあり、最後に山下理事長から謝辞が述べられた。
午後5時からは、中澤桂チャリティコンサートがホテル・リゾートのホールで開催され、日本参加者の他に、カトマンズ関係者、寮生などを招待。約180名参加
- 8.8 場所をカトマンズに移し、ホテル・リゾートのホールで、曲目も変えて同じコンサートが開催され、日本参加者のほか、在日本の日本人会の方々なども含めて、約300名が鑑賞した。両コンサートには、平岡日本大使も参加された。
- 8.9～ この後、日本参加者は、カトマンズ観光後帰国組、カトマンズ滞在・ダウズ・展望ホッピング組、ゴサウクトの聖なる湖ホッピング組の3コースに分かれて、それぞれの旅を楽しんだ。8月16日までに全員帰国。
- 8.15 第1回ボタニカル理事会開催（寮運営についての規程を検討）
- 8.26～31 山下理事長日本訪問（AAF赤尾代表のさくら寮建築確認に同行した）
- 9.3 第4期第4回理事会（文京学院大学・カトマンズ・ブータン）
- 9.17～10.2 杉浦実理事日本訪問（中西部 Dang のフィールド・ボタニカル訪問・調査とキャンプ）
(2006年10月5日現在)

新入会員ならびに里親をお誘いください。

口座名：NPO 法人 日本ネパール女性教育協会

口座番号：0130-4-370983（郵便振替口座）

個人会員：3,000円 個人賛助会員：10,000円

学生会員：1,000円 法人賛助会員：50,000円

（共に年会費）

フォスターペアレント支援口座（郵便振替口座）

口座名：JNFEA ネパール女性教育養成里親基金

口座番号：00110-3-355493

NPO 法人日本ネパール女性教育協会 (JNFEA)

理事長 山下泰子

本部 113-8668 東京都文京区向丘 1-19-1 文京学院大学山下泰子研究室

事務局長 島本純雄 377-1412 群馬県吾妻郡長野原町北軽井沢 2032-1519 編集：新井場貞子 滝田尚子 島本純雄 吉田俊吾

Tel&Fax 0279-84-4688

E-mail:shima@sannet.ne.jp

http://www.page.sannet.ne.jp/s_shima/nepal-home.html

